ペスタロッチー教育賞
受賞者紹介

俳　優

佐野浅夫（さのあさお）　氏

佐野浅夫氏は、1925（大正14）年横浜市生まれ。1943年、日本大学芸術学部在学中に劇団苦楽座に入団、以後、劇団文芸劇場、新協劇団を経て、1950年劇団民芸に参加。新劇俳優として「セールスマンの死」「アンネの日記」などに出演し高い評価を得る一方、映画「真空地帯」やテレビドラマでも幅広く活躍し、とりわけ国民的テレビ時代劇「水戸黄門」の３代目黄門として人気を博した。

今回のペスタロッチー教育賞の受賞は、俳優としての佐野氏のもう一つの顔、子どもたちへの「お話の語り手」としての活動に対するものである。佐野氏は、1954（昭和29）年にスタートしたＮＨＫラジオ番組「お話でてこい」の童話の語り手として、今日まで47年間毎週月曜日と火曜日に出演し、放送回数は4,000回以上、語ったお話の数も3,000話に及んでいる。この番組における氏の活動は、テレビや子どもの絵本、玩具もなかった時代から、多様なメディアにあふれる現代まで、多くの子どもたちを引きつけ、音声のみによって子どもの心にワクワクやドキドキ、安らぎや夢を与え続けてきたものとして高く評価される。

また、氏は創作童話の執筆にも取り組み、「お話でてこいのおじさんのお話」（1990年）は、ト書き入り創作童話として子どもたちへの読み聞かせを積極的にすすめる保育現場や保護者サークルに話題をよんだ。さらに「お話の心を語る」や「お話で育つ心」をテーマとして講演活動を続けるとともに、俳優の仕事で訪れた先など各地で、子どもを対象とした語り、高齢者施設での慰問の語りを現在も行っている。このような活動に対して、すでに久留島武彦文化賞（1975年）、モービル児童文化賞（1978年）などが贈られている。

今日の子どもを取りまく世界では、あふれるほどのモノと情報があり、お話も３Ｄメディアで提供されている。その一方で、幼児期からの心の教育が切実に求められ、その一環として母親たちの読み聞かせ、お話会のサークル活動が全国で地道な活動を展開している。また、小学校の教室でも教師の読み聞かせる物語に静かに耳を傾ける児童の姿がある。このような状況の中で、47年間一貫して音声メディアによって多くの子どもたちに語りかけ、その情感を豊かにし、想像力を広げた氏の活動は高く評価されるべきものである。また氏の活動を顕彰することは、お話や語りの活動を通して子どもの心を育もうとしている多くの保護者や保育者、教師を励ますものとなるはずである。

教育賞の名に冠したペスタロッチーも、著作「リーンハルトとゲルトルート」の中で子どもにお話を聞かせる居間の母の姿を描き、シュタンツでは自ら孤児たちに語りかけることを常とした。「母の声は子どもに消しがたい印象を与え、聴覚が人間を真に人間にする基盤となる」のである。

佐野浅夫氏の長年にわたる多大な功績に対して、第10回ペスタロッチー教育賞を贈呈し、ここに高く顕彰したい。